

「テーマ (2)」

1. はじめに

- (1) あいさつ (1~7 節)
 - ① 「心の絆」を結んだ。
 - ② パウロの使命意識が明らかになった。
- (2) ローマ教会との関係 (8~15 節)
 - ① 前回は、1:16 を取り上げた。
 - ② 今回は、1:17 を取り上げる。
 - ③ このメッセージは、「序言」のまとめのメッセージである。

2. 「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」(17 節)

- (1) ロマ書の中で最も重要な聖句である (聖書全体と言ってもいいかもしれない)。
 - ① 15 節と 16 節をつなぐ言葉になっている。
 - *パウロはローマでの伝道を強く願っている。
 - *なぜなら、彼は福音を恥としないからである。
 - ② 16 節と 17 節をつなぐ言葉になっている。
 - *福音は救いに至る神の力である。
 - *なぜなら、福音の内には神の義が啓示されているからである。

3. メッセージのアウトライン

- (1) 神の義の啓示
- (2) 信仰の原則
- (3) 旧約聖書に見られる原則

4. メッセージのゴールは、福音の本質 (7 つの側面) を理解すること。

このメッセージは、ロマ 1:17 を通して、福音の本質を理解するためのものである。

I. 神の義の啓示

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、」

1. 「神の義」と対立する概念は、「人間の義」である。
 - (1) 「人間の義」とは、業による救いことである。
 - ①「人間の義」は、人間世界において誕生した義であるがゆえに、分かりやすい。
 - (2) キリストの福音以外のものは、すべて「人間の義」を追求しようとするもの。
 - ①ユダヤ教は、血筋による救いと、業による報酬を教える。
 - ②イスラム教は、業による救いを教える。
 - ③その他の宗教も、すべて「人間の義」を追求しようとするもの。
 2. 「神の義」とは何か。
 - (1) 罪人を「律法という法廷」の中で義と宣言すること。
 - (2) 罪人に「神の義」を転嫁すること。
 - (3) それを実現する方法(計画)自体が、神の性質に反していないこと。
 - (4) つまり、ゴールも方法も神の義なる性質に叶っているということ。
 3. 「神の義」は福音のうちに啓示されている。
 - (1) 「神の義」は、人間世界において誕生した義ではないので、分かりにくい。
(例話) 内村鑑三の回心体験

II. 信仰の原則

「その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです」

「それ(神の義)は、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」(新共同訳)

「out of faith, into faith」(信仰から出て、信仰に至る)

1. 福音は、最初から最後まで、信仰を土台としてのみ機能する。
 - (1) 信仰は源であり、ゴールである。
2. 救いの3要素の再確認
 - (1) 義認(過去形の救い)
 - ①善良な人間になったということではなく、義と宣言されたということ。
 - ②父なる神との関係が変化し、和解させられた。
 - ③義認は、信仰によってのみ成就する。

(2) 聖化(現在進行形の救い)

- ①完成に向かうプロセスである。
- ②クリスチャンはみな、この過程を歩んでいる。
- ③聖化は、信仰によってのみ成就する。

(3) 栄化(未来形の救い)

- ①救いが完成した状態である。
- ②私たちはやがて栄光の姿に変えられる。
- ③栄化は、信仰によってのみ成就する。

3. 信じた人には、上の3つのステップが保証されている。

(1) それゆえ、福音の3要素を日々確認する必要がある。

- ①キリストの復活までしっかり語ること。

(2) キリストは生きておられる。

- ①そのキリストに信頼を告白する。
- ②キリストの力によって救いの完成へと導かれる。

III. 旧約聖書に見られる原則

『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」

1. 信仰の原則は、すでに旧約聖書に存在する。

(1) ハバクク書2:4からの引用。

- ①新しい教えではなく、昔から知られていた教えである。
- ②当時の信者は、異邦人信者も含めて旧約聖書の知識が相当あった。

(2) いかなるディスペンセーション(経綸、時代)においても、信仰の原則は存在している。

2. ハバクク書2:4の文脈

(1) ハバククの第1の疑問

- ①神の民ユダの中で暴虐が行われていた。
- ②彼は、それに関して何度も祈って来たが、神からの回答はない。
- ③神はどうして民の罪をそのまま放置しておられるのか。

(2) 神の回答

- ①ユダを裁くための器が起こされる。
- ②その器は、これまた暴虐を特徴とするカルデヤ人(バビロニア)である。
- ③この時点では、バビロニアは注目されることのない小国。
- ④それゆえ、この国が強国として登場することは、驚愕すべき出来事。

(3) ハバククの第2の疑問

- ①ハバククは、イスラエルの民が完全に滅びることはないと確信している。
- ②その理由は、神と彼らの間に契約関係があるから。
- ③なぜユダよりも邪悪なバビロニアを用いてユダを裁くのか。
- ④第1の疑問よりも重大な疑問である。
- ⑤この疑問は、20世紀のホロコーストに関する疑問と同じである。

(4) 神の回答

- ①神のことばを信じ、それに従って生きる人は信仰者であり、義人である。
- ②ハバククは、神がなぜカルデヤ人を用いてユダを裁くのか、理解できない。
- ③しかし神は、最終的にはすべての問題が解決することを信じるように命じた。
- ④次に神は、罪深く傲慢なカルデヤ人は必ず滅ぼされると預言される。

(5) ハバククの祈り

- ①神の計画が最善であることを信じて前進する。
「しかし、私は【主】にあつて喜び勇み、私の救いの神にあつて喜ぼう」(3:18)
- ②逆境が彼を神に近づけた。
「私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる」(ハバクク書の最後の節、3:19)

結論：福音の7つの側面をまとめてみる。

1. 福音の制作者は神である。
2. 福音には神の力が内蔵されている。
3. 福音は人に救いをもたらす。

(1) 義認

(2) 聖化

(3) 栄化

4. 福音はすべての人に差し出されている。
5. 福音を受け取る唯一の方法は、信じることである。
 - (1) 信仰に始まり、
 - (2) 信仰に終わる。
6. 福音には神の義が啓示されている。
 - (1) 信じる人は、神の義を持つ。
 - (2) 神ご自身の義と矛盾しない方法である。
7. 福音の伝達には順番がある。
 - (1) ユダヤ人
 - (2) 異邦人